伯太藩陣屋跡（その２）現地公開資料

公益財団法人　大阪府文化財センター

２０１４．１０．４

遺跡の概要

今回の調査地は大阪府和泉市伯太町４丁目に位置し、遺跡分布としては伯太藩陣屋跡と信太千塚古墳群に含まれます。信太千塚古墳群は信太山丘陵上の東西 1.2 ㎞、南北３㎞程度の範囲に、古墳時代前期末から終末期にいたる時期の古墳が多数点在することで知られています。一方の伯太藩陣屋は丘陵先端部に位置し、陣屋の周囲を囲っていた土塀の様子が「伯太の赤塀」として伝えられています。

近隣ではこれまでも和泉市により平成 16 年度・平成 17 年度・平成 18 年度・平成 21 年度・平成 22 年度に、平成 25 年度には当センターが道路用地内で調査を行っています。

陣屋とは？

一万石以上の石高で、藩をかまえる大名のうち、二万石以下の石高の小藩大名は城を構えることがゆるされませんでした。その場合、城に代わるものとして築かれたのが陣屋です。政庁の役割も果たした藩主の屋敷を要とし、家臣の屋敷を計画的に配し、その周囲に土塀等の囲いを設けていました。

伯太藩とは？

初代藩主の渡辺丹後守吉綱が、寛文元年（1661）に１万石の加増を受け、兄から受け継いだ武蔵国比企郡内などの 3500 余石とあわせて１万 3500 余石を知行し、大名に取り立てられたのが起こりです。

元禄 11 年（1698）に武蔵国にあった知行地が近江国四郡に移されるとともに、藩の居所は和泉国大鳥郡大庭寺に移り、大庭寺藩となりました。その後、享保 12 年（1727）にはさらに大庭寺から和泉郡伯太村へ居所を移すこととなり、伯太藩が成立しました。

和泉国伯太に移ってから国替はなく、明治２年（1869）の版籍奉還を迎えました。明治４年（1871）の廃藩置県に際し、旧藩邸が伯太県庁に転用されましたが、明治 19 年に堺県に統合された際、それも取り壊されました。

図１　調査場所位置図

図２　調査区位置図

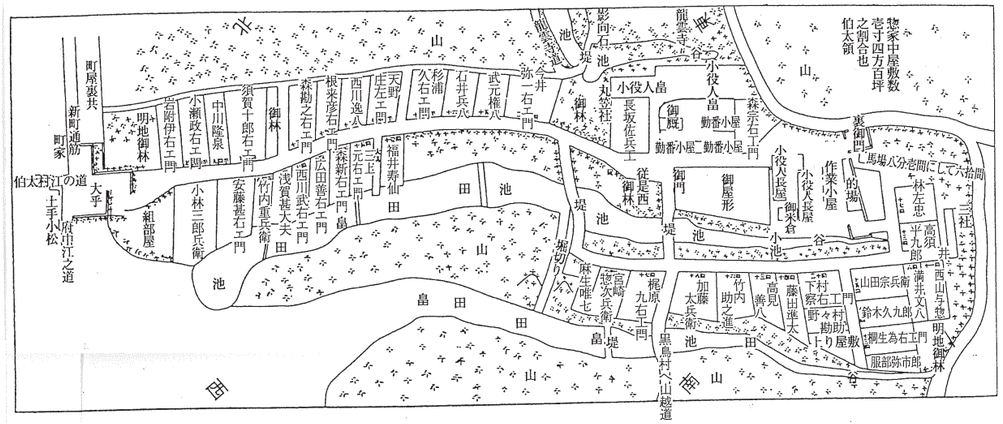

図３　前段階の陣屋

＊図３・図４は和泉市史紀要第 14 集『伯太藩関係資料目録』2007　和泉市史編さん委員会　より転載加筆

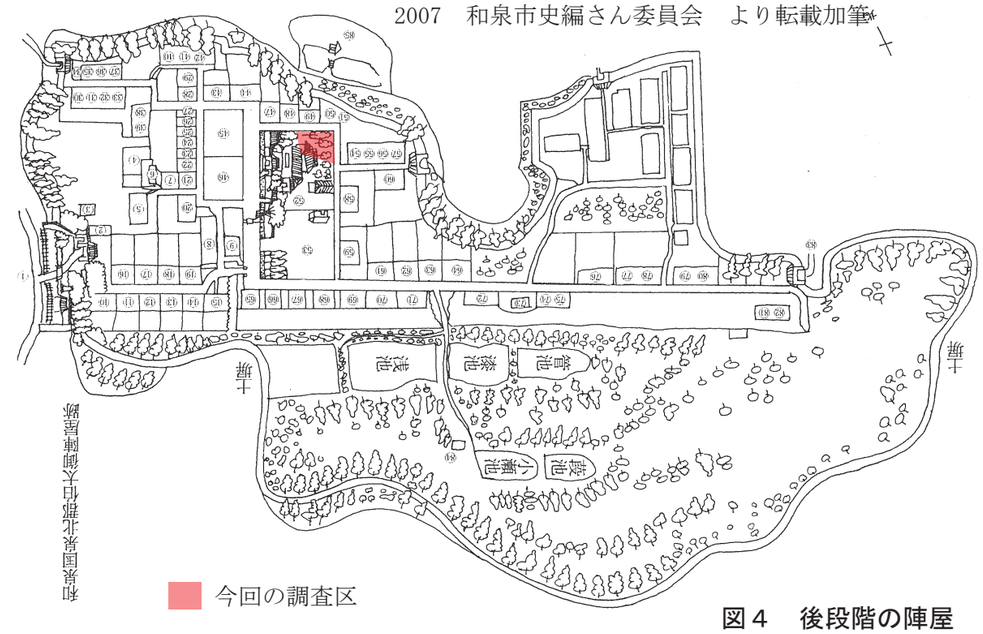

図４　後段階の陣屋

陣屋の変遷

伯太村に移った当初は、陣屋の造成に着手できず、伯太村の庄屋青木甚左衛門の屋敷を一旦、仮陣屋としたといわれています。陣屋造成後は、藩主と家臣の一部が陣屋の中に居を定めました（図３）。この際の陣屋は、周囲から古材等を集めて突貫工事で築造されたものであり、年数を経て老朽化が激しくなったこと、家臣の一部はその間も周辺の村に仮住まいを続け、それが藩と村の双方にとって大きな負担になっていたこと等から、明和７年（1770）に大規模な陣屋の改修が行われました（図４）。

廃藩置県後も、陣屋には伯太在住という名が付され、伯太村と別村の形をとっていましたが、明治以降は、藩士の転居が続き、徐々に人口が減少したため、明治 19 年には伯太村と統合されました。

伯太藩の陣屋は、現在の地番でいえば伯太町３丁目と４丁目にまたがり、周囲約４㎞近くで面積は 1714.7ａ（17 町３段歩）の広さだったとみられます。

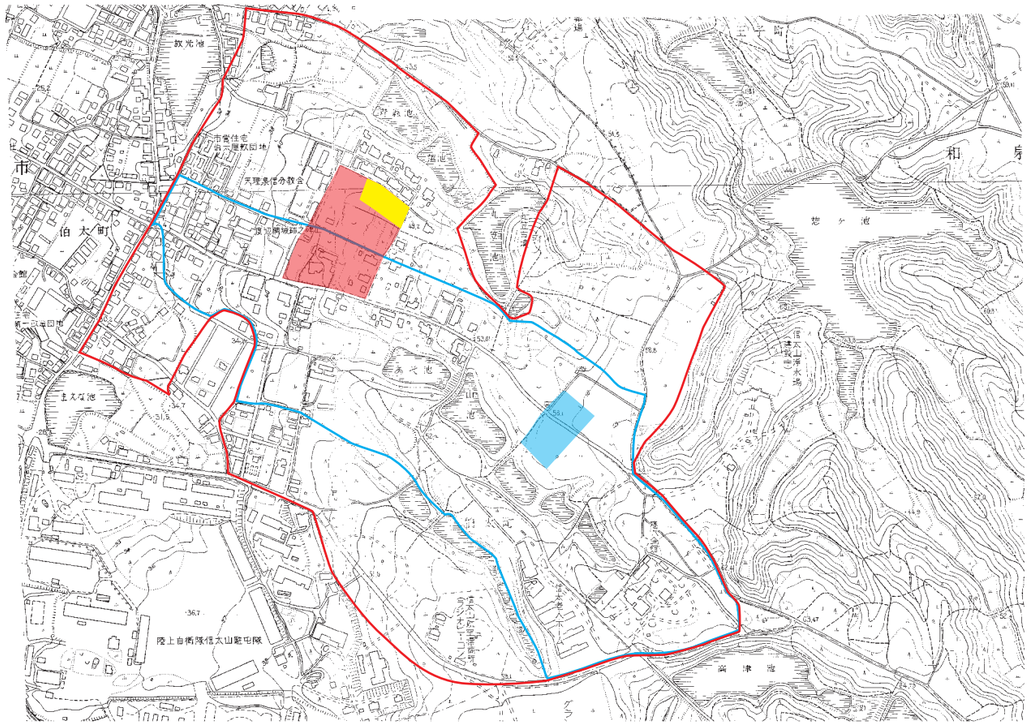

図５　陣屋の範囲推定図　前段階の陣屋の推定範囲　前段階の藩主屋敷推定地　後段階の陣屋の推定範囲　後段階の藩主屋敷推定地　今回の調査区

全景写真

壁に石を張った溝

井戸

つくばいの排水施設（水琴窟）

つくばいの排水施設

今回の発掘でわかったこと

今回の発掘調査では、後段階の陣屋の様子が徐々に明らかになっています。特に、藩主の屋敷地（表御殿跡）にあたっているとみられる調査区では多数の遺構を検出しました。しかし最終段階の陣屋の様子を描いた絵図（図４）では、今回の調査区は館の背後にあたり、木が描かれています。おそらく絵図には、屋敷の外側から見て特に目につく建物だけが描かれ、それ以外の構造物は省略されたと思われます。したがって、絵図では何も描かれていない東御殿跡にも、様々なしつらえがなされていたのではないかと想像されます。かつての大名屋敷では、社交の場として重要な役割を果たした庭園が、敷地の半分ほどを占めていたとも言われていることから、こちらには庭園や茶室などが設けられていたのかもしれません。

今回の調査区では、井戸や多数の土坑・ピット、溝を検出しました。溝は一定の方向を意識して通っており、壁の部分に土留めの瓦や石を張り付けたものもありました。それらの溝で囲まれた部分は、周囲より一段高くなっており、台上の高まりになっています。おそらくこれは建物の土台となる部分ではないかと考えられます。残念ながら礎石らしきものを検出しなかったため、建物の正確な位置や構造はわかりませんが、大ざっぱな規模や方向は把握できそうです。

土坑の中には甕や擂鉢を水平に伏せた状態で埋め込んだものも見られました。それらの土器の底には穴があけられていました。それらは井戸や溝のそばに位置しており、つくばいや手水鉢の手前に設けられた排水施設と考えられます。その中には、大型の甕を埋めたものもありました。これなどは、水を流すと音がでる仕掛けを施した水琴窟だったと考えられます。

出土遺物の大半は、瓦や日常使いの食器でしたが、向付の鉢や、非常に質の良い染付皿の破片等も含まれているようです。また鳥水入れがいくつも出土しています。さえずりの美しい鳥を飼って、鳴き合せなどを楽しんだのかもしれません。